

第8期ぎふ政治塾 第2回講座

第1部講演

「地方行政をとりまく現状と課題 藤原本巣市長の話聞いて」

塾生番号035 神野 浩明

今回の講義は、首長を志す自分にとってとても参考になるものであった。

藤原市長は岐阜県職員として議会事務局長や西濃地域振興局長などの要職を務められた後、公益財団法人岐阜県産業経済振興センターの副理事長に就かれたが、周囲の要請に応えられ、本巣市長選挙に出馬された。市議会議員などの周りの力に支えられ、このタイミングでしかない時期・年齢で市長選に立たれたとご自身が言っておられたが、お話を聞き、そうした運を引き寄せる魅力的な人柄であると感じた。

ご講演のなかで、県の仕事と市町村の仕事の違いについて触れられたが、県は管理事務的な仕事为主であり、県民と直接話をする機会は少ないが、県職員は仕事全体を体系立てて解決策を考えていることに長けている。一方、市町村は市民と直結した仕事为主であり、毎日が現場仕事であるために、市町村職員は住民対応が上手く、その場その場で仕事をしていく能力に長けている。こうしたご経験を踏まえられたお話は説得力があり、興味深く聞かせていただいた。

現在の市町村職員には体系立てて物事を考えることができる能力が求められており、研修機会を設けて、若い職員を鍛えておられ、組織は人、職員が伸び伸びと仕事ができる環境をつくるのが大事だとおっしゃったが、行政のトップとして職員力を向上させることがいかに大切なことかを認識しておられることに感銘を受けた。

次に、市町村行政の現状について述べられ、地方分権以降市町村の裁量権が増し、首長の考えにより自由にできる時代となっている。首長のリーダーシップが上手く発揮されている市町村にとっては、自主性が増したことはプラスに働くが、リーダーシップが発揮されない場合は、地域の独自性を活かすことができず、行政サービスの低下につながりかねないと指摘されたが、全くの同感である。

首長は地域の舵取り役として、地域の課題を正面から受け止め、ときには住民の参画、住民との協働を経ながら、解決策を見出し、地域の特性を活かし、地域を活性化していく政策を創り出し、実行していく十分な能力が求められていると改めて感じた。

また、少子高齢化と人口減少社会においては、財源の確保が課題となっており、企業誘致などにより稼ぐとともに、行財政改革を進め、行政運営の効率化を図ることが必要だと言われたが、種を蒔きつつ、行政をスリム化していくのは難しいが、時代の要請であると感じた。

最後に、「市長職は忙しく、休日も大方行事があり、体力・気力がないと務まらない」、「トップは孤独である」、「身边はいつもきれいにしておかなければいけない」、「市長は毎日、政治活動・選挙運動をしているようなものである」「議会とは日頃から意見交換や様々な事柄について相談し、良好な関係を築く」等の言葉はどれも参考になった。

藤原市長には市長としての自信と誇り、首長としての矜持が感じられた。自分も藤原市長のような首長になりたいと改めて決意を強くした。

以上